K. マルクスの疎外論と物象化論
――マルクスとハイデッガー（2－1）―

秋　田　　清

1　問題の所在

かつて、初期マルクスと後期マルクスの関係に関してさまざまな議論が展開された。わが国においては、廣松渉が「疎外論から物象化論へ」と、その「叙述の方法」の相違を強調し、それに対して山之内靖は、廣松の議論は、フォイエルバハからの影響を軽視し、そのことによって、人間の対自然関係や個の問題を論じることが出来なくなっていると批判していた。また、細見英、望月清司は、マルクスの疎外論が展開されている『経済学・哲学草稿』を含む「パリ草稿」において、後の物象化論につながる発想が胚胎していることを強調していた。

いうまでもなく、一人の人間の思想が初期と後期とでまったく違うものになることは不可能に近い。断絶説、連続説といっても、詳細に見れば、マルクスの思想の核心に関する強調点の相違に過ぎない。その意味で、ここで、相対立する両者のどちらかに与して、マルクスの思想を論じようとしているわけではない[1)]。問題にしたいのは、後期の著作、とりわけ『資本論』に、初期の疎外論がどのように生かされているかということである。

その際、さしあたり、問題の中心になるのは、廣松が提示している「実体＝主体の自己定立、自己疎外を抜きにして果たして弁証法の論理が存立しうるか？　弁証法的展開の機動力が失われはしないか？」（廣松『マルクス主義の成立過程』、p. 234）という問いである。また、カール・レーヴィットが言うように「現代の人間世界における人間性の運命如何という問題」（レーヴィット『ウェーバーとマルクス』、p. 10）を無視するわけにはいかない。そうでなければ、「体制の叙述であると同時に、体制の批判でもある」ことの意味は明確にならないであろう。マルクスの「物象化論」は、物象化や物神性のカラクリを説明すれば事足りるというものではない。

さきに私は、『経済学・哲学草稿』におけるマルクスの疎外論がどのようなものであったのか、その中で後の展開につながっていく要素に関して論じた。

廣松渉も次のように語っていた。

> 自己疎外という考えを媒介として三つの源泉の総合的統一が成就されえたのであり、この意味において『自己疎外』はそれを俟ってのみマルクス主義が成立しえた当のものである（廣松渉『マルクス主義の成立過程』、pp. 59－60）。

この点に関して異議を唱えるものはいないだろう。また、廣松が、エンゲルスを援用して語る次のことも、常識に属するといえる[2)]。

> 「もはや分業のもとに下属されない諸個人を哲学者たちは『人間』の名のもとに理想として表象して来

た。而して、吾々が〈以上〉展開してきた全〈歴史〉過程を、彼等は『人間』の発展過程として把えた。その結果、従来の各歴史段階における個人に『人間』が押し込まれ〈それが自己疎外の主体とされることによって〉歴史の推進力として叙述された。かくして全過程は『人間』の自己疎外過程（Selbstentfremdungsprozeß "des Menschen"）として把えられたのであるが、このことたるや本質的には、後の歴史の平均的個人が前段階に押し込まれ、後代の意識が前代の個人に押し込まれたことに由来するのである。――初めから現実的諸条件を捨象する顛倒によって、全歴史を意識の展開過程に変じえたのである」（山括弧に収まっている部分は廣松の補足）（『成立過程』、pp. 64－65。『ドイツ・イデオロギー』廣松版、pp. 152－153。廣松版によると、この部分はエンゲルスの筆跡になっている）。

廣松によれば、こうした歴史把握を超克したものこそ、「フォイエルバハに関するテーゼ」における「人間とは社会的諸関係の総体である」という人間把握である。すなわち、

マルクスはこのような人間把捉を超越して次のように述べている。「人間の本質は、個々の個人に〈共通に〉内在する抽象的一般者（Abstraktum）ではない。人間的本質（人間という存在者）は、社会的諸関係の総体（Ensemble）（テーゼ６前半）。マルクスは「類的存在」としての人間というフォイエルバッハ的主体概念からの脱却と相即的に（テーゼ６後半）かくの如き新たな主体概念をとるに到ったのである（『成立過程』、p. 67）。

このことに、さしあたり筆者も異存はない。しかし、廣松は、このことから次のように、人間を歴史の「所産的主体」と直接規定する。

一般化して言えば、人間の本質を社会的諸関係の総体として把える以上、かかる人間は、第一次的には歴史の能産的主体ではなくして所産的主体である。いわゆる史的唯物論の公式を援用して云えば、「人々はその生の生産において、一定の・必然的な・つまり彼らの意思から独立な諸関係に〈受動的被規定的に〉入り込む」のであって、人々が歴史の主体たりうるのはかかる被規定性・第二次性においてのみである（『成立過程』、p. 69）。

「人間の本質を社会的諸関係の総体として把える」ということが、ただちに、人間は、「第一次的には歴史の所産的主体」と断定することにつながるだろうか。人間を単純に「所産的主体」と規定してしまうと、廣松が行なっているように、次のように強弁せざるをえなくなる。

プロレタリアートにとっては、現代社会のザイン認識は直ちにプロレタリア的実践の契機となるのであって、「ゾレン」と分裂しない。それ故、向自的プロレタリアにとっては、「自己疎外」などを持ち出して、ことさら「ザインとゾレンとを統一」することは、まったく無用である（ibid、p. 77）。

たしかに、ザイン認識と分離された「ゾレン」は現実的意味をもちえない。だが、「直ちにプロレタリア的実践の契機になる」ザイン認識とはいかなる認識か。廣松のいう「向自的プロレタリアート」は、どこから登場するのであろうか。たしかに、マルクスもまた、『聖家族』において次のように述べていた。

あれこれのプロレタリアが、あるいは全プロレタリアートそのものが、さしあたり何を目的として思いうかべているかが問題なのではない。プロレタリアートがなんであるか、また彼の存在におうじて何をなさざるをえないかが問題である。その目的と歴史的行動は、彼自身の生活状態のうちにも、

また今日のブルジョア社会の全組織のうちにも、明白に、取り消しようのないように示されている（『聖家族』、p. 34）。

いうまでもなく、この引用ですべてが解決しているわけではない。いうところのプロレタリアートの「目的と歴史的行動」はどこから生まれてくるのか。上の引用によると、「プロレタリアートの存在」と個々のプロレタリアートの意識と行動は、直接的には区別されている。廣松の言う「向自的プロレタリアート」とは「彼の存在におうじた、目的と歴史的行動」を意識し体現した存在であることになる。だが、マルクスは、プロレタリアートあるいは労働者階級を階級にまで形成することについてしばしば語っていた。この問題は、廣松においてはどのように展開できるのであろうか。

以下、廣松に学びながら、マルクスの思想の展開を追い、問題そのものをより詳しく見ることにしよう。

2　疎外論の超克

マルクスは『聖家族』で、「思弁的・ヘーゲル的構成の秘密」について、次のように述べている。

もし私が現実のリンゴ、ナシ、オランダイチゴ、ハタンキョウから、「果実」という普遍的表象をつくるとすれば、さらにすすんで現実の果実からえられた私の抽象的表象「果実なるもの」が、私の外に存在する本質であり、ナシ、リンゴなどの真の本質であると想像するならば、私は――思弁的に表現すれば――「果実なるもの」を、ナシ、リンゴ、ハタンキョウなどの「実体」であると公言することになる（『聖家族』、p. 56）。

リンゴ、ナシ、ハタンキョウ、オランダイチゴが、実は「実体なるもの」、「果実なるもの」にほかならないとすれば、どうして「果実なるもの」が、ときにはリンゴとして、ときにはナシとして、ときには、ハタンキョウとしてあらわれるのであるか・・・。

・・・それぞれの世俗的果実は、「一なる果実」のそれぞれの生命の発現であり、「果実なるもの」自体が作る結晶体である。だから「果実なるもの」は、たとえばリンゴにおいてリンゴの定在を、ナシにおいてナシ的定在を自己に与えるのである。・・・リンゴ、ナシ、ハタンキョウを、相互からわかつ区別は、まさに「果実なるもの」の自己区別であり、この区別が特殊の諸果実を、「果実なるもの」の生活過程のうちに区別された分枝にするのである（ibid、pp. 57－58）。

思弁的哲学者が、このように引き続いて創造行為を成就するのは、ただ彼が、リンゴやナシなどの周知の性質を――それはこれらを実際にながめれば見いだされるものだが――彼がつくりだした規定だといいくるめることによってであり、また彼が、抽象的悟性だけが創造できるもの、すなわち、抽象的悟性公式に、現実の物の名称をあたえることによってであり、最後に彼が、それをつうじて彼がリンゴの表象からナシの表象に移行してゆく彼自身の活動を、絶対的主体の、すなわち「果実なるもの」の、自己活動だと公言することによってである。

この操作を、思弁的言いまわしでは、実体を、主体として、内的過程として、絶対的人格として理解するとよぶ。そしてこの理解がヘーゲル的方法の本質的性格をなすのである（ibid、p. 59）。

こうしたマルクスの論述に対して、廣松は次のように述べる。

『経哲手稿』の類的存在としての「人間」はどうか？　この時点でのマルクスは、ヘーゲルの「精神」をもはやかつてのごとく、単なる「自己意識」としてではなく、「フィヒテ的な自己意識とスピノザ的実体との統一」として、すなわち「人間」を原型とするとして把え直すのであるが、しかしこのフォイエルバハ的な「人間」もまた『果実』ではないのか？　『類的存在』、『人間』は、飲みかつ食わねばならぬ諸個人、この意味での実在的な人間の述語から独立の主語に転化された主体＝実体、実体＝主体だと云わざるをえない。『経哲手稿』当時のマルクスは、類としての人間を実体＝主体とすることによって、ヘーゲル的弁証法＝自己疎外の論理そのものは継承しうると考えていたのではなかったのか？　それは、しかし、結局のところ、類的存在としての人間という『果実』を実体＝主体とする思弁的構成－“連続的創造”ではないのか（『成立過程』、pp. 212－13）。

さらに、廣松は、次のようにも述べる。

後期マルクスの弁証法は、しかし、決して『神聖家族』時代の発想の単純な延長線上にあるわけではない。もし当時の発想がそのまま維持されていたならば、抽象から具体への上向は、それこそ「果実」からリンゴ、ナシ、等々、具体的な定在への天下り！　として斥けられたであろう。しかるに『資本論』においては、商品（価値）が貨幣に転化し、さらに資本に転化し、それがさらにさまざま姿態転換（メタモルフォーゼ）を遂げているではないか。その際「商品」ないしは「価値」が、貨幣、資本、等々の述語から自立的な主語に転化されていないか？　現にマルクスは「価値の自立的運動」を説いている（ibid、p. 218）。

いうまでもなく、「『神聖家族』時代の発想」を廣松がいうように単純化するわけにはいかない。さきに引用したようにマルクスは、「プロレタリアートがなんであるか、また彼の存在におうじて何をなさざるをえないかが問題である」という「発想」も保持しているからである。

だが、廣松が指摘するように、『資本論』におけるマルクスは、あたかも「果実」なるものが、リンゴやナシになるかのような論述をしている。たとえば、第１章、第３節、A、「４単純な価値形態の全体」において「商品の価値形態または価値表現は商品価値の本性から出てくるのであって、逆に価値や価値量がそれらの交換価値としての表現形式から出てくるのではない」（『資本論』①、p. 116）などである。

これはしかし、「従来の各歴史段階における個人に『人間』が押し込まれ〈それが自己疎外の主体とされることによって〉歴史の推進力として叙述された」のと、あるいは、「『果実』からリンゴ、ナシ、等々、具体的な定在への天下り」などと同じであろうか。

廣松は「後期マルクスの弁証法は、しかし、決して『神聖家族』時代の発想の単純な延長線上にあるわけではない」（『成立過程』、p. 218）と述べ、後期マルクスの弁証法を可能にしたものは、「価値」の存在性格そのものへの着目であるという。すなわち、

「価値」は、商品生産が汎通的な社会にあっては、共同主観的・社会的に、一つの自立的な対象性として、単に共同主観的な認識の対象としてではなく、現実にgeltenしている。それは社会的にgültigな、それ故に客観的なGedankenformなのである。それは「抽象的人間労働の凝結体」として、この共同主観的な対象性認識の存在根拠をなす（『成立過程』、p. 222）。

マルクスはこの新しい存在性格をもった「価値」をアルケーとすることによって「資本論の弁証法」を展開することができた。

けだしこの新しいアルケーは、ヘーゲルのごとき顛倒に陥ることなく、しかもヘーゲルの実体＝主

体、主体＝実体としての「精神」がその体系のロゴスとして機能しえたのと類似の役割を果たしうるのである（ibid、p. 223）。

すなわち、廣松は、ヘーゲルにおける主語の述語化に触れ、次のように述べる。

主語と述語との関係をノミナリズム的な発想でとらえ、かつ、アリストテレス的に主語＝実体を考える場合には、述語の主語化はなるほど許すべからざる暴挙であろう。しかし、主語化された述語は、その実、形而上学的な実体ではなく、Geltung としての存在性格をもつ。ヘーゲルはこの点を知らなかったというよりも、文字通り述語の主語化＝実体化を行い、しかもこの実体を自己運動の機能を持つ主体として措定した。その限りでは『神聖家族』における思弁的構成の批判は当っている。がしかし、主語に送り込まれた述語は、ヘーゲルがいかに誤想したにもせよ、実際には伝統的な感性態と悟性態とのいずれにも属せぬ第三領域の Geltung である。この限りでは、「価値」の存在性格に即して“実証主義的”ノミナリズム的な水準を越えたマルクスにとっても、述語の重層的な主語化は今や容認しうる論理の構造である（ibid、p. 226）。

かくして、廣松は、「マルクスは、商品はしかじかであるという命題の述語を次々主語に繰り込んで、あるしかじかの商品は貨幣である、或るかくかくの商品は資本である、というように、具体的・現実的な場面で主語の重層的な具体化を遂行しうる」（ibid、p. 229）と述べる。

だが、問題は、ここからである。廣松も「実体＝主体の自己定立、自己疎外を抜きに果たして弁証法の論理が存立しうるか？　弁証法的展開の機動力が失われはしないか？」と問題を立て、前者については

ヘーゲルにおいても、実体＝主体が自己を疎外して何になるか、また如何に回復して、何になるか、これは地上的・経験的な規定に依拠しており、これを前節で指摘した展開の論理（「重層的主語化の論理」――引用者）に俟って舞台回ししているのが実情であって、彼がレアルな議論を展開しえたのはこの限りであった。すなわち、そもそもヘーゲルにおいても、彼の体系は……、それ自体としては無規定的（規定以前的）な抽象的一般者を端初とする総合的判断の体系なのであるから、究極的な主語＝実体とその自己定立は、展開の論理そのものに対しては遇有的である。この故に、ヘーゲル流の主語＝実体を、別の汎通的な普遍的一般者で置換しても、展開の論理そのものは依然として存立しうる（ibid、p. 234）。

そのかぎり、「実体＝主体の疎外を抜きにしても、――当の領域において汎通的な普遍的一般者を主語としつつ、件の“重層的主語化の論理”が立てられうる限り――依然としてそれらは gültig なはずである」と、廣松は、展開の論理的なメカニズム、構造は、マルクスの場合も同様であるという。廣松は、「ヘーゲルの場合には主語が同時に主体であることによって自己運動が可能」であるとして、次のように続ける。

マルクスの場合にも、ある種の場面では歴史的・現実的な運動の追認として、主語の自己運動であるかのごとくに扱いうる局面もある。しかし、事象そのものの歴史的運動に機動力を帰しうるのは、歴史性と論理性とが一致する限りにおいてであって、マルクスとしては『物質なるもの』の自己運動の追認に終始することはできない。「価値」の背後に人々の営為を立てたからといって同断である。歴史性と論理性とが常に必ずしも合致しない限り、体系の展開は、ヘーゲルが観望者 Zuseher の位置に

おいた für uns（われわれにとって）というときの wir（われわれ）の資格における賓述、これによって ein geistig Konkretes（精神的に具体的なもの）が再生産されることに懸かる。……賓述によって単に主語表象が心理的に変様するのではなく、第三領域の Geltung（妥当）たる主語対象性は、意味成体として変成する。しかもこの意味成体を Prägnieren（懐胎）するものが Gegenstand für uns（われわれにとっての対象）なのであるから wir の賓述によって、マルクスがいう通り「精神的に具体的なもの」が生産されるのである（ibid、p. 235）。

廣松の論述は、説得的である。廣松は、対象を捉える主体が違えば、捉え方が違えば、対象が異なって見えることを否定しているわけではない。それは、廣松にとっては、「物象化的錯視」として容易に説明できる。だが、「意味成体」、「精神的に具体的なもの」という限り、常識的な言葉で言えば、それは「主観的」なものである。それを「主体的」なもの、つまり、社会的に妥当なものにするのは、「社会的諸関係の総体」としての人間把握、諸関係の「項」としての個人把握および「第三領域の妥当性」、「社会そのものが行っている抽象」である。

ヘーゲルの場合には、ヘーゲルが体系の「舞台回し」をしており、マルクスの体系においては、直接的には、マルクスが「賓述」をしている。この点に関して、筆者も異存はない。さらに、「認識には主観の側による構成的契機が介在しているのであって、認識の歴史性・社会性は、この『構成』が歴史的・社会的に制約されていることに因る」（『地平』p. 284）という指摘も肯ける。だが、それは、そのかぎりでは、体系がどこに向かうのかについての方向を示すものではない。そうであれば、「賓述」といってみたところで、現実の展開の追認の域を出るものではない。「プロレタリアートが何であるか。何であるかに応じて何をなさざるを得ないか」の内容を示すことにはならない。廣松は、「最大の生産力は労働者階級である」というマルクスの把握を見落としている[3)]。

廣松の展開からは、「歴史的運動の起動力」は、ブルジョア的生産様式の枠内での、「社会的諸関係の総体」の運動の機動力しか出て来ないのではないだろうか。それは、『資本論』体系の始源（根拠）の把握のあいまいさにも示されているように思える。すなわち、廣松は、「価値」は「抽象的人間労働の凝結体」として、この共同主観的な対象性認識の存在根拠をなす」という。だが、『資本論』の「始源」は、商品である。廣松は、しばしば、「始源」は必ずしも「商品」である必要はなかったと語り[4)]、この点に疑問を呈している。だが、そうだろうか。彼は、「商品」から始まっていることの意味を明確に捉えていないように思える。また、たとえば、『経済学批判要綱』においてマルクスが体系の展開をそこから始めようとしていた「生産一般」が『資本論』においては、労働過程論に生かされているとも語っているが、問題はそれほど直接的であろうか。ともあれ、『資本論』の展開を追ってみよう。

3　『資本論』における物象化論

いうまでもなく、『資本論』における物象化論とは、『資本論』体系の総体をさす[5)]。しかもそれは、未完の体系である。だが、体系叙述の方法、「構え」[6)]を問題にしているここでは、その一部を詳述することで済ますことも許されるであろう。

マルクスは『資本論』を次の言葉で始める。

資本制的生産様式が支配的に行われている社会の富は、一つの「膨大な商品の集成」として現れ、個々の商品は、その要素形態（Elementarform）として現れる。それゆえわれわれの研究は商品の分析

から始まる（『資本論』、p. 71）。

『資本論』第１部「資本の生産過程」の第１編「商品と貨幣」の構成は次のとおりである。

第一篇　商品と貨幣
　第一章　商品
　　第一節　商品の二つの要因　使用価値と価値（価値実体　価値量）
　　第二節　商品に表される労働の二重性
　　第三節　価値形態または交換価値
　　第四節　商品の呪物的性格とその秘密
　第二章　交換過程
　第三章　貨幣または商品流通

この構成と冒頭の一文とをそのまま受け取れば、『資本論』体系の始源は「商品」であると考えるのが常識的であろう。だが、廣松は、「マルクス本人は、必ずしも『商品』から出発するつもりはなかった」（『資本論の哲学』、p. 2）といい、これに疑問を呈している。そうして、しばしば、「商品（価値）」と記述したり、「価値」を「アルケー」という表現で示したりしている。

廣松が、上の引用において、「必ずしも『商品』から出発するつもりはなかった」と述べているのは直接的には、「生産一般」と対比してのことである。すなわち、『経済学批判要綱』の一部「経済学批判序説」においては、「第一節、生産一般」から始まっているが、

> 『要綱』のうちには、比較的早い時期に「交換価値、貨幣、価格を考察するこの第一篇……生産の内部編成が第二編……」といった表現も見られる。しかし、ともあれ、1858年になってから、「価値、貨幣、資本」という講案がはっきりするようになり、58年11月29日付のエンゲルス宛の手紙で始めて「第一章、商品」という表現が使われている（『哲学』、p. 4）。

このように述べ、彼は、「生産一般」についての考察は、「『資本論』では、『労働過程』論に生かされているかもしれない」（『哲学』、p. 4）という。直接的には、廣松の指摘は異議を唱えるようなものではない。しかし、「生産一般」ではなく、「商品」から叙述を始めるようになったときに、「生産一般」は「労働過程論」など『資本論』の一部に生かされるようになったというようなものであろうか。それは、機械的に過ぎないだろうか。このことは、『資本論』体系総体の性格理解にもかかわることであるように思える。

ともあれ、『資本論』の論述を見ることにしよう。

マルクスは第一章、「第１節　商品の二つの要因　使用価値と価値（価値実体　価値量）」において次のような展開をしている。先に引用した冒頭の一文に続けていう。「商品は、まず第一に、外的対象であり、その諸属性によって人間の何らかの種類の欲望を満足させるものである」（『資本論』、p. 71）。この欲望がどのようなものであろうとも、その欲望を満たす「ある一つの物の有用性は、そのものを使用価値にする。しかし、この有用性は空中に浮いているのではない。この有用性は、商品体の諸属性に制約されているので、商品体なしには存在しない」（ibid、p. 73）。「使用価値は、富の社会的形態がどんなものであるかにかかわりなく、富の素材的な内容をなしている。われわれが考察しようとする社会形態にあっては、それは同時に素材的な担い手になっている――交換価値の」（ibid）。

マルクスは、ある物の有用性は「商品体なしには存在しない」という。だが、使用価値は「交換価値の素材的担い手になっている」という一文をみて、人は、使用価値は交換価値の素材的担い手になっていることが確認できれば、使用価値の問題はおいて、交換価値の分析に移ればよいと考える。しかし、マルクスは、ある物を使用価値にする有用性は“空中に浮かんでいるものではない”といい、使用価値は、富の素材的内容をなしていると“同時に”交換価値の素材的担い手になっていると述べているのである。

すなわち、冒頭の一文の意味するところは、富が商品という形態をとっているがゆえに、資本制社会が孕まざるを得ない矛盾を展開することを提示しているのである[7)]。

つづいて、マルクスは、交換価値の分析を行う。

「交換価値は、まず第一に、ある商品の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現れる」(ibid、p. 74)。それは、時と所によって絶えず変動するので、偶然的なもの、純粋に相対的なものに見え、「商品に内的な、内在的な交換価値というものは、一つの形容矛盾であるように見える」(ibid)。

> ある一つの商品、たとえば１クォーターの小麦は、ｘ量の靴墨とか、ｙ量の絹とか、ｚ量の金とか、要するにいろいろの割合の諸商品と交換される。だから、小麦は、さまざまな交換価値を持っているのであって、ただ一つの交換価値を持っているのではない。しかし、ｘ量の靴墨もｙ量の絹もｚ量の金その他も、みな１クォーターの小麦の交換価値なのだから、ｘ量の靴墨やｙ量の絹やｚ量の金などは、互いに置き換えられうる、または互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない。そこで、第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの同じものを表している、ということになる。しかし、第二に、およそ交換価値は、ただ、それとは区別されるある実質の表現様式、「現象形態」でしかありえない、ということになる（ibid、pp. 74－５）。

二つの商品の交換関係は、たとえば、１クォーターの小麦＝ａツェントナーの鉄という等式で表すことができるが、この等式は、同じ大きさの一つの共通物が二つの違ったものの中に存在することを表している。つまり、両方ともある一つの第三のものに等しいことを意味している。それが交換価値であるかぎり、この第三のものに還元できるものでなければならない。この第三のものとは何か。

それは、商品の自然的属性ではありえない。使用価値としては、諸商品は、いろいろに違った質であるが、交換価値としては一分子の使用価値も含んではいない。「商品体の使用価値を問題にしないことにすれば、商品体に残るものは、ただ労働生産物という属性だけである」(ibid、pp. 76－７)。労働生産物の使用価値を捨象するならば、労働生産物の有用性とともに、労働生産物に表されている労働の有用性は消え去り、これらの労働のいろいろな具体的形態も消え去り、これらの労働はもはや互いに区別されることなく、すべてことごとく同じ人間労働に、抽象的人間労働に、還元されているのである。これらの労働生産物に残っているものは、「無差別な人間労働」の「凝固物」でしかない。

> これらの物が表しているのは、ただ、その生産に人間労働力が支出されており、人間労働が積み上げられているということだけである。このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは価値―商品価値なのである（ibid、p. 77)。

このようにしてマルクスは、「商品の交換関係または交換価値のうちに現れる共通物は、商品

の価値なのである」(ibid、pp. 77－8）という。

そうして次に彼は、価値の大きさを論じる。価値の大きさは、生産中に支出される労働の量、労働の継続時間で計られるが、

> 諸価値の実体をなしている労働は、同じ人間労働であり、同じ人間労働の支出である。商品世界の諸価値となって現れる社会の総労働力は、無数の個別的労働力からなっているのではあるが、ここでは一つの同じ人間労働力とみなされるのである。これらの個別的労働力のおのおのは、それが社会的平均労働という性格を持ち、このような社会的平均労働として作用し、したがって一商品の生産においてもただ平均的に必要な、また社会的に必要な労働時間だけを必要とするかぎり、他の労働力と同じ人間労働力なのである。社会的に必要な労働時間とは、現存する社会的に正常な生産条件と、労働の熟練および強度の平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間である（ibid、pp. 78－9）。

上に見てきたように、マルクスは、商品を分析し、交換価値の社会的実体を抽象的人間労働に求める。純粋に形式論理的に見れば、生産物の有用性を生産する労働、具体的有用労働から、有用性一般を生産する労働を抽象することも可能である。だが彼はそうはしない。それは、ここで問題になっているのが、直接的には商品生産社会における、労働と資源の配分の法則であるが、より根底的には、人間を、自然的、共同的、意識的存在として捉えるマルクスの人間観による[8)]人間の社会的な物質代謝の歴史的形態把握であるからである。

この意味で、「抽象的人間労働」の物質的根拠を、マルクスが「人間の一定のエネルギーの支出」に求めたことを根拠に、また、労働の社会的配分が必要だからといって、『資本論』でいう「抽象的人間労働」が商品生産社会以外においても妥当するというのは、彼の把握とは違う。商品生産以外の社会における「人間の一定のエネルギーの支出」という意味での「抽象的労働」は、直接的にはあくまでも、使用価値を作る労働、一定量の有用性を作り出す労働でしかない。そこでは、それが奴隷所有者であれ、封建的領主であれ、支配者の意識的操作によって統制されているのである。疎外論の論理で語れば、価値とは意識的関係の疎外されたものである。

「第二節　商品に表される労働の二重性」においてマルクスは、「いろいろに違った使用価値または商品体の総体のうちには、同様に多種多様な、属や種や科や亜種や変種を異にする有用労働の総体―社会的分業が行われている。社会的分業は商品生産の存在条件である。といっても、商品生産が逆に社会的分業の存在条件ではない」と述べ、商品生産が行われていなくとも分業が行われている場として、古代インドの共同体や資本制社会における工場内の分業を例としてあげる。そうして、社会の生産物が一般的に商品という形態をとっている社会では「独立生産者の指示として互いに独立に営まれるいろいろな有用労働のこのような質的相違が、一つの多肢的体制に、すなわち社会的分業に、発展する」(ibid、p. 84）という。

> しかし、上着やリンネルなど、すべて天然に存在しない素材的富の要素の存在は、常に、特殊な自然素材を特殊な人間欲望に適合させる特殊な合目的的生産活動によって媒介されなければならなかった。それゆえ、労働は、使用価値の形成者としては、有用労働としては、人間の、すべての社会形態から独立した存在条件であり、人間と自然との間の物質代謝を、したがって人間の生活を媒介するための、永遠の自然必然性である（ibid、p. 85)。

次にマルクスは、単純労働と複雑労働の区別を行い、より複雑な労働は、ただ、単純な労働の倍加されたものであり、複雑な労働の生産物の価値は、その商品を単純労働の生産物に等値するのであり、単純労働の一定量を表していると述べ、これ以降では、換算の労を省くため、各種の労働力を直接に単純労働力とみなすといい、生産力の発展に関して論じる。

１着の上着の生産に必要な労働が２倍に増すか、半分に減ると、１着の上着が以前の２着の上着と同量の価値を持ったり、２着の上着が以前の１着の上着と同量の価値しか持たなくなる。「素材的富の量の増大にその価値量の同時的低下が対応することがありうる。このような相反する運動は、労働の二面的な性格から生ずる（ibid、p. 90）。

マルクスは、この節を次のように締めくくる。

> すべての労働は、一面では、生理学的な意味での人間労働力の支出であって、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品価値を形成するのである。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間労働力の支出であって、この具体的有用労働という属性においてそれは使用価値を生産するのである（ibid、p. 91）。

いうまでもなく、マルクスが商品を分析し、労働の二重性を剔抉したのは、資本制社会における労働と資源の配分法則を明らかにしようとしたというに止まらず、彼が「労働」を人間の（疎外された）生命活動そのものとして捉える人間（社会＝歴史）観による。だが、「生産一般」に関する議論はこれとはいささか趣をことにする。たとえばマルクスは『要綱』においていう。

> 生産一般に妥当する規定が分離されなければならないのは、まさに主体である人間と客体である自然とはどこでも同じだということからすでに生じる統一のために、本質的な差別を忘れないためである。この差別を忘れるところに、たとえば現存の社会的関係の永遠性と調和とを証明する近代の経済学者の知恵がつきるのである（『要綱』、p. 7）。
>
> （また）
>
> 要約すれば、すべての生産段階には共通な諸規定があり、それらは思惟によって一般的なものとして固定されるのであるが、しかしいわゆるすべての生産の一般的条件とは、右のような抽象的諸契機にほかならないのであって、それによっては現実の歴史的な生産諸段階はどれも理解できない（ibid、p. 10）。
>
> （さらに）
>
> われわれが到達した結果は、生産、分配、交換、消費が同一であるということではなくて、それらが一個の総体の肢節を、一つの統一の内部での区別をなしているということである。生産は、生産の対立的規定のうちに自己を包摂するとともに、他の諸契機をも包摂している。過程はつねに新たに生産から始まる（ibid、p. 21）。

マルクスが「生産一般」というタイトルの下において論じようとしたのは、「近代の経済学者」が、特殊ブルジョア的生産関係を永遠の自然法則と捉えようとしていることに対する批判であり、生産、分配、交換、消費が「一個の総体の肢節」をなしており、「過程はつねに生産から始まる」ことを確定せんがためである。廣松がいうように、その一部が「労働過程」に生かされているといった類のものではない[9)]。

さきに見てきたように、資本制社会が支配的な社会においては、富が商品という形態をとって現れ、個々の商品はその「Elementarform」なのである。「エレメント」は、「基本」、「要素」、「原

基」などなんと訳そうと、それによって構成される一単位をさしているだけではなく、それは富が、社会的＝歴史的形態をとる“場”でもある。マルクスが冒頭でいう「社会の富」とは、生産された外的対象のみを指すわけではない。そうでなければ、『資本論』においてマルクスは、銀行制度や金融制度にいたるまで、商品を始源として展開することは不可能であった。まして、人間とは「社会的諸関係の総体」などと言うことは不可能であったのである。

追　記

本稿は、『紀要』規定の字数を大幅に上回ってしまった。続論は、稿を改めたい。

〔参考文献〕

マルクス、カール『聖家族』（*Die heilige Familie*, 1844, 9～1846, 2）マルクス・エンゲルス全集（MEW）2、大月書店、1960年。

『資本論』（*Das Kapital*、1973年、〈初版1867年〉）岡崎次郎訳、第1巻、第1分冊、国民文庫（訳は必ずしも従っていない）。

『経済学・哲学草稿』（*ökonomishe-philosophische Manuskripte*, 1844）城塚登・田中吉六訳。岩波文庫、1964。

『経済学批判要綱』（*Grundrisse der Kritik der politischen Ökonmie*, 1857－1858）高木幸二郎監訳、大月書店、1959－1965年。

廣松渉　『マルクス主義の成立過程』、至誠堂、1968年（『成立過程』と略記）。

『マルクス主義の地平』、勁草書房、1969年（『地平』と略記）。

『資本論の哲学』、現代評論社、1974年（『哲学』と略記）。

廣松渉編著『資本論を物象化論を視軸にして読む』岩波セミナーブックス18、1986年。

註

1）われわれは、『経済学・哲学草稿』「第1草稿・前段」、あるいは「第2草稿」の残された最後の部分にある「私有財産の関係は労働、資本、およびこの両者の関連である」（『草稿』、p. 117）以降の要約を、「第2草稿」全体の要約と解釈すれば、「第2草稿」も、『資本論』総体の原初的な草稿と読むことも可能であり、「ミル評註」において、貨幣の物神性について語られているとも読める。個別的な論述に関しては、こうした解釈は成立するであろう。ただ、体系の構成総体としては、廣松が指摘するように、異なったものである。

2）「理想化された人間が、従来の各歴史段階における個人に『人間』が押し込まれ、それが自己疎外の主体とされ」た展開と『経済学・哲学草稿』のマルクスの展開を単純にいいうるかどうかという問題も残るが、一般的に言えば、過去を理想化して、それを「再建する」ことなど出来はしない。それにもかかわらず、過去の一面を理想化し、そこからしばしば、われわれが、未来を構想することも事実である。資本制社会において、過去の歴史総体を総括せんとするマルクスの思考は、ここに根拠のひとつを持っている。

3）マルクスの論述は、あえて言えば、叙述であると同時に陳述でもある。言い換えれば、彼の希望あるいは夢を語る物語である。いわゆる「空想的社会主義」との相違は、それが現実の展開に根拠を持っているか否かにある。

4）廣松は、この点に関して、「始源」は「価値」であるべきだと、積極的に展開しているわけではない。

5）廣松も、『資本論の哲学』では、第一篇のみを取り扱っているが、『資本論を物象化論を視軸として読む』を編集し、そこでは『資本論』全3巻について論じている。

6）「構え」という用語は廣松による。廣松は「方法」という用語がしばしば、内容を含まず、形式の論理（たとえそれが「弁証法的」と称されようとも）をさしていることが多いので、「方法」という用語を避け「構え」を使用している。

7）冒頭「商品」が、資本制社会における商品であるか、「歴史的な単純商品生産社会」における商品であるかという論争にはかかわらない。これが前者であることは、前節および以後の行論から明らかである。それは、資本制以前の商品交換にも、ある程度当てはまるというにすぎない。

8）廣松は、「自然発性的分業」にこれまでの歴史展開の根拠を求めているが、そのかぎり正当である。だが、関係の第一次性を強調するあまり、「分業」が人間の外的自然との物質代謝としての“労働”の分割であることを軽視することになっている。

9）たしかに『資本論』の「労働過程」においては、「労働過程はまずさしあたり（zunächst）どんな特定の社会的形態にもかかわりなく考察されなければならない」（『資本論』①、p. 311）と述べられているし、「労働はその素材的諸要素を、その対象と手段とを消費し、それらを食い尽くすのであり、したがって、それは消費過程でもある」といった『要綱』との類似の一文もある。だが、ここでは、「労働過程」について論じられているのであって、「生産一般」について論じられているわけではない。